

随 筆

貴重な水辺のいくつかー3 コッツウォルズの水辺

亀田 泰武*

なった。

1. はじめに

コッツウォルズはイギリスで最も美しい田舎とされていて、英国観光のツアーの多くが、ロンドン周辺、湖水地方と並んで、コッツウォルズ地方を組み入れている。昔、羊毛産業で栄え、蜂蜜色とされるライムストーンの古いたたずまいの建物が多く、心を和ませてくれる。主要な観光スポットだけで30カ所以上あるが、観光の目玉となるような派手なものは多くない。ロンドンに近く、別荘地域ともなっている。落ち着いて滞在できる、緑に囲まれた小規模な別荘風ホテルのようなマナーハウスも多い。マナーハウスはもともとそう地位が高くない貴族などが荘園に建設した邸宅で、いまでは、小規模から中規模の田舎の邸宅の名前にもなっている。

また庭園も多く観光ガイドに載っているもので21もあった。日本庭園に近い、自然との調和を考えた英国式風景式庭園も多い。多くの観光スポットは透明なせせらぎが流れている。

筆者は2006年の夏ツアーに参加した。ツアーでも2日観光したが、ロンドン観光の日、一人だけ離れてコッツウォルズのガイドツアーを頼んだ。事前準備のなかでインターネットでコッツウォルズの観光資料を探していたら、地域のHPがあり、その中で車付き個人ガイド (Private Hire Taxi) の紹介があった。日本語ガイドもいる。その中の一人に連絡したところ、当日予約があるので別のガイドを紹介してくれた。名前はジェニーさん (Ms. Genny Stallabrass)。メールで水辺を主体にしてほしいことを頼み、待ち合わせ場所を打ち合わせた。決めたのは待ち合わせ場所と帰りの時間だけであとは向こう任せ。日本流のおまかせで信頼関係の仕事のやり方が向こうでもあるのだと感心した。コッツウォルズには合計3日もいたのに、訪問できたのは一部であった。天気は良く、写真には絶好の日と

2. 旅行の準備

個人ツアーはトラブルを自分で解決するしかないのが非常にリスクが大きい。臨機応変に対処できる人はいいが、トラブルがあるとすぐかたまってしまう小生などは相当の準備が必要である。待ち合わせ場所は当初コッツウォルズ地域の中心くらいの駅でといわれたが、汽車の本数が少なく、逃した時が大変なので、1時間に2本くらいで、逃しても次のに乗れる、東部のオックスフォード駅にしてもらった。出発はロンドンパディントン駅で、若い頃一度利用したことがあってなじみがあり、幸いなことにツアーのホテルから地下鉄で近かった。大都市の滞在ではホテルの立地が重要



*KAMEDA Yasutake, (株)クボタ 水・環境・インフラ事業本部
個人URL <http://www.mizumirai.net/sitema/>

である。添乗員に聞いたら、ロンドンは景気が良く、世界中から人が集まるため、バックツアーでは都心のホテル確保が大変で、運が良かったそうである。

駅に到着し、目的の列車がいるホームに行ったところ列車が停車していたが、車内は真っ暗で乗車できる状況でなかった。そのうちに乗車できるようになるだろうと思い、ついでに前の方に歩いて行ったらなんとその長い列車の前に、目的の列車が停車していた。同じホームの先にいるとは思っても付かなかった。もし動かないで待っていたら、見逃していたのだろう。

イギリスの鉄道は民営化以来、複雑な料金体系になっていて、季節割、早割などがあって前もって購入した方がいいというのでインターネットで申し込んだ。クレジットカードで申し込んだところ、切符は現地に行ったらATMのような機械にカードを差し込んでパスワードを入力すると出てくるというものであった。これだと不安なので高くても直接現地窓口で購入した方が良かった。

3. コッツウォルズ地方の観光

ロンドンの西、特急で30分くらいのところにあるオックスフォードを東端に、シェークスピアの生まれた街のストラットフォード・アポン・エイボンに北端に、また浴室の語源となって温泉のあるバースを南端にする長さ80km、幅30kmくらいの地域である。広い地域に見どころが散在している。観光場所の多くがせせらぎ沿いにあり、こじんまりとした水辺の古い建物が独特の景観を醸し出している。石灰岩地形で流れ出す地下水が透明で、きれいな流れがあちこちに見られる。カルシウム分がリンを吸着不活性化して藻類の繁殖を抑え、高い透明度を維持しているのであろう。テムズ川の源流の一つもここから流れ出ている。ただ石灰岩地形の特徴である鍾乳洞はないようである。山地の浸食が進んでなだらかな地形となり、テムズ川の源流があるといっても標高がないので鍾乳洞はあっても満水で観光するような状況にはないと思われる。掘り出した石灰岩は建物の建築に使われ、石灰岩の蜂蜜色が美しい家並みを形成している。退職後に田舎で悠々自適の生活をするというのがイギリスの大都会で働く人の夢といわれているが、コッツウォルズ地域は人々のあこがれの場所になっている。

コッツウォルズ地域には多数の小規模な見所が分散している。有名なところはともかく、バスが止められないところも多い。これから車で案内してくれる少人数のガイドツアーがいい。お客はアメリカ人が多いが

日本人も案内しているそうである。残念なことに小規模な水辺は肝心のところが私有地になっているところが多い。いい水辺には昔水車小屋があり、それが別荘として使われていて川ごと私有地となって立ち入れないようになっている。

4. ボートン・オン・ザ・ウォーター

コッツウォルズの北部の中央にある街で人気が高い。街の中央を小さなウインドラッシュ川が流れている。川幅は15mくらいであろうか。水は透明で水深は10cmくらいと非常に浅い。子供が喜んで川の中を歩いている。川沿いに家が並び芝生の広場が広がっていて、いくつもの小さな石橋が架かっている。川沿いの民家はレストランやお土産店に。

少し下流にある車が通れる小さな橋の脇に道が川に入れるようにみえた。なんと一台の乗用車が橋を渡らず、平然と川の中をジャブジャブ渡っていった。



写真-1 ボートン・オン・ザ・ウォーター中心街
ウインドラッシュ川の右側は芝地に、左側は古風なたたずまいのレストランなど



写真-2 ウインドラッシュ川の上流
石垣の右側の本流と邸宅庭園から流れてきている支流がここで合流。橋の右も左も個人庭園。

ここは団体ツアーで訪問したところであるが、ジェニーさんが見せたいところがあると再度訪れた。駐車場に車を置いて街に入り、ツアーで来たところの少し上流の川が暗渠になって途切れている近くで川から少し離れた狭い小道を入っていった。野原をしばらく歩くとまた川沿いの道にでた。そこまで来たところで、一本道なので一人で景色を見ながらずっと先まで行くと広い道路に出るところがあり、車を駐車場から回してくるのでそこで待つように言われた。

小道を歩いていくと突然視界が開け、今まで見たものと違ういい景色が待っていた。二つに分かれた流れが、大きな屋敷を挟んで流れ、ここで合流していた。川沿いの土地は屋敷の庭に見えるが立ち入れない。右の流れは屋敷の下から出てくるようであった。左の流れはその対岸の向こうまで庭園が続いていた。そこの写真を撮ってから右の小道を進んだが、すぐ流れを離れ、しばらく歩いたら広い道路に出た。少し道を歩くとそこは丁度ウインドラッシュ川が道路沿いに流れているところであった。繁茂する底の水草がよく見える透明な流れで、川の反対側に小さい堰が二つあり、そこから対岸の広い庭園に水が落ちていていた。川は下流と違い水深もあるが、水が透明で底に生えている水草までよく見えた。また下流を見ると橋が架かっていてその向こうは屋敷であった。屋敷の中には水車のある作業場があったのであろう。結局川の周辺のいいところが個人邸宅の中に入っていて入ることができない。道路側から邸宅に入る橋、川向こうの庭に行く橋と二つある橋も屋敷の敷地にある。屋敷の広さは長さ120m、幅50mくらいであった。清流のある庭を楽しめるとはなんと贅沢なことであろうか。



写真ー3 ローアースローターのアイ川
中央の煙突が水車小屋。

5. ローアースローター

小さなアイ川沿いの集落である。ボートン・オン・ザ・ウォーターの少し上流になる。透明なせせらぎの川沿いに住宅が少しならんでいるひなびたところ。集落のはずれにレンガの煙突のある建物があり、かつて水車小屋で今は小さな博物館になっている。ここから上流のアップアースローターまで牧場など田園の中を行く散歩道がある。

6. バイブリー

南コッツウォルズの村。コルン川が流れている。川のそばにスワンホテルがある。ツタで覆われた、コッツウォルズを代表する建物で、ホテルのそばにはアーチの古い橋が架かっている。

コルン川はホテル上流のマス養殖場で二つに分かれている。マス養殖場は広大な観光農園のようで庭園もきれいに管理している。ホテルの下流150mくらいの所に小さな石橋があり、それを渡るとアーリントン・ローと呼ばれるライムストーンの数軒の長屋が並んでいる。14世紀に羊小屋や倉庫として建てられ、17世紀に屋根裏が増築され機織り職人が住むようになった。天井高も低く小さい建物であるが、ナショナルトラストにより保存され、人が住んでいるのが面白い。長屋の前にはコルン川の小さな派川が流れている。観光客が見るバイブリーの広さは川沿いの200mくらいの小さなものであるが、趣がある。



写真ー4 スワンホテルとコルン川
川には魚がけっこう泳いでいた。

7. ケブル橋

田園地帯を走っていくと家が2～3軒しかないイーストリーチの道路端で止まって、すぐ横の小川に案内



写真-5 リーチ川とケブル橋

された。小径を行くとそこには透明な流れがあり、古い石造りの橋がかかっていた。バスが来れないところで、小グループのツアーでないと行けないし、日本のガイドブックには載っていない。ジェニーさんのお気に入りの場所である。このリーチ川の流れは小川にしては豊富で、石橋も趣があった。橋は一人一人通れるくらいの狭さで、柱石の上に薄い一枚板を渡した簡単なもの。割れて落ちこちそうで、よく長年こわれなかったものである。橋の途中に階段があって水辺に降りられるようになっていた。橋を渡って川沿いに歩いて行った先には小さな教会があった。

8. ブレナム宮殿

コッツウォルズ地方の東に位置し、オックスフォードの西約13kmのウッドストックにある。つつましい田園風景が大半のコッツウォルズ地域では珍しい大規模な宮殿である。王室所有でないのが不思議なほど壮大であった。

このブレナム宮殿は、スペイン継承戦争中の1704年8月にフランス軍をドナウ河畔のブレナムという村で破ったことを記念して、アン女王が初代マールバラ公爵（Duke Marlborough）に贈ったもの。初代マールバラ公爵の名前はジョン・チャーチルといい、ウィンストン・チャーチル首相の先祖で、スペイン継承戦争では総司令官を務めていた。

チャーチルもこの宮殿で生まれ育った。戦時下の逆境で総理大臣を務めた才能を持つ人材であったので、あまやかされないで厳しく育てられたのであろう。宮殿の大部分は公開されているが、11代公爵が居住されている。

驚くべきはその広さで8.4平方キロメートルもあって、外苑と北の丸公園を含めた皇居の4倍にもなる。



写真-6 水のテラスと宮殿南翼

池の形状、噴水、植え込み、4隅の彫像など、精緻で見事な西洋式幾何学庭園

宮殿と北東の庭園を結ぶミニトレインまでである。

宮殿建物は中央棟とその両側に北翼、南翼の中庭を持つ3つの建物からなり、中央棟を中心に左右対称に並んでいる。ただ北翼は南翼より少し横長で、上から見ると対称形が崩れている。玄関は北翼にあって、見学者もそこから出入りする。中央棟は北西正面に中庭があり、1kmも離れた遠くに勝利の塔を望んでいて、反対側の南東面は広大な芝生の原となっている。中央棟と北西にある勝利の塔を結ぶ線が宮殿の軸線となっている。この南東に向く軸線の意味があって古戦場のブレナム（ドイツ内）の方角であろうかと考えて地図を調べたら、延長線上にはパリがあって、ブレナムはもっと東であった。

中央棟北東には幾何学的な刈り込みのあるイタリア庭園、南東には水のテラスが面している。宮殿と庭園はヴァンプラー卿が担当しフランス風のバロック様式でつくられた。

水のテラスは2段になっていて、上段は宮殿建物に隣接し、いくつもの池や噴水、また4隅に彫像など、曲線で構成され精巧につくられている典型的な西洋庭園である。下段は正方形の池が配置されているが少しデザインが荒い。

初代マールボロ公爵婦人はアン女王とは仲の良い幼なじみで、この関係から女王が壮大な宮殿をプレゼントしたらしい。ただ公爵婦人は暮らしやすい普通の家に住みたい願望が強かったようで、ヴァンプラー卿とぶつかったり王室と関係が悪くなってしまっ、国のお金が入らなくなってしまった。この後マールボロ公爵が負担して宮殿ができた。

4代侯爵は1760年代に“ケーパビリテイ”ブラウンとウィリアムチェンバーに庭園の改造をさせた。この



写真-7 ヴァンプラーの大橋

左の方にある勝利の塔と右の宮殿を結ぶ広い道路の橋。

とき英国風風景庭園の流れが持ち込まれ、宮殿内を流れる川を堰き止めて広大な女王の池がつけられた。これにより宮殿から勝利の塔に行く4車線道路くらいの幅のある広い道路の中間にあるヴァンプラーの大橋が少し水没してしまった。

橋は訪れたとき午後の日を浴びて見事な景観を提供していて、撮った写真はイギリスの旅行で一番いいものであった。橋の北東（右）の池には中の島があり、風景式庭園の見事な眺めをつくっている。

9. ストラトフォード・アボン・エイボン

コッツウォルズ地域には含まれないが、北の端にあって、交通の便がよく、コッツウォルズへの旅の基点となっている。シェークスピアの生誕の地として有名である。ゆかりの建物も保存されている。この田舎町で生まれ、ロンドンに出て劇作家として成功し、ここに戻って晩年を過ごした。生家が保存され見学できるようになっている。家はずいぶん立派であるが、ベッドも造作も小さい。昔は体をかがめて寝ていたそうである。古い家は天井高の低い建物も多い。イギリスは以前中央アジアから渡ってきたケルト人の国であったが、5世紀頃欧州北部沿岸地域にいたゲルマン人系のアングロサクソン人が移住してきて国を支配した。先住民の背が高くなかったので、古い家の天井などが低かったのだろうか。英国は階層社会になっている感じで庶民に比べ、支配階級は背が高いように思える。街中でも日本人くらいの体格の人が多く、身長にあまり違和感がない。

栄養状態がよくなって背が伸びたということもあるのだろう。我が国でも、各地に残る昔の偉人ゆかりの建物は天井高が低い。



写真-8 ストラトフォード・アボン・エイボンの船溜まり

手前がエイボン川に接続する1段の閘門。ナロウボートがびっしり停泊していた。

ストラトフォード・アボン・エイボンは鉄道とともに運河の起点となっている。旧市街の東側にはエイボン川が流れていて、その脇に船溜まりがあり、数十隻のナロウボートが停泊していた。船はカラフルに塗装されていて見るのも楽しい。船溜まりの横は公園になっている。公園は昔舟運が盛んであった時、倉庫街であった。物流の変化により、不要になった倉庫街が取り壊され公園になった。公園の隣、エイボン川に面してシェークスピア劇場がある。

10. ナロウボート

英国の水辺では運河とナロウボートが大きな存在になっている。国中に狭い運河が張り巡らされている。産業革命当初、運河による舟運が効率的で、いたるところにつくられた。欧州でも運河が多い。ただ後発の蒸気機関車による鉄道がもっと便利に物資を運べたので舟運は廃れてしまった。英国では運河が保存され、レジャーや観光のルートとして貴重な存在になっている。運河を通る船には鉄道のような規格があり、幅7フィート2インチ、長さ72フィートの細長いもの。レールと違ってこれより小さいものは航行できる。運河の幅はときとして、船幅ぎりぎりの狭いところがある。ナロウボートは運河航行を目的とするレジャー船で、英国ではヨットのような存在で非常に数が多い。運河が張り巡らされているので、あちこちに行くことができる。ボートは個人で所有するもの、借りて船旅を楽しむもの、船のツアーを楽しむなどいろいろある。ホテル船の場合寝室が最大3つくらいである。ホームページを見ると様々なコースの沢山の広告がでている。エンジンで駆動するがスピードは徒歩と同じくらい。

ゆっくりとした船旅である。陸上に行く運河であるので、所々にある閘門の通過が必要となり、閘門の操作は乗り組み員が行わなければならない。

ストラトフォード・アボン・エイボンの船溜まりとエイボン川の間には1段の閘門があった。閘門の二つの水門の操作を誤ったら船溜まり上流の水が一気に流れ出して大事故になるので日本であったら管理者が操作しなければならないと思われるが、さすが自己責任の国である。

船溜まりから北に延びるストラトフォード・オン・エイボン運河の側道を歩いていたら丁度一隻の船が出航するところであった。船溜まりから狭小な橋をくぐってゆっくり行くのだが、花だとか小物を載せている船の天井と橋の間はぎりぎりの10cmくらいしかなかった。住宅地の間にある細い運河は停泊しているボートでさらに狭くなっているが、その間をすり抜けて出て行った。



写真-9 出航するナロウボート

橋桁すれすれで、運河の脇に停泊している船の横を通っていった。

ストラトフォード・アボン・エイボンはエイボン川と北のバーミンガムまで行くストラトフォード・オン・エイボン運河の接続点になっている。運河を少しさかのぼれば、ロンドンの方から来るグランドユニオン運河に接続する。このように、あみめのように張り巡らされた運河によりナロウボートは国内どこにでも行ける感じである。ロンドンのパディントン駅近くにはリトルベニスという大きな船溜まりがあり、ウォーターフロントのオフィス街として再開発されて、いい水辺景観を形成している。ここから東へ行くリージェント運河があり、途中のカムデンタウンまでは遊覧船が往復している。遊覧船は客席が並んで構造は違うが、大きさはナロウボートと同じで、ボートとすれ違ったりして運河交通を少々体験できる。途中、運河のため

に掘られたトンネルを通っていく。カムデンタウンは浅草原宿のような所。

リトルベニスから西へはグランドユニオン運河に連絡する、パディントンアーム運河がある。

リトルベニスからグランドユニオン運河、長さ百メートル以上の運河橋を渡るストラトフォード・オン・エイボン運河を経てトラトフォード・アボン・エイボンまで船旅を楽しむことができる。

コッツウォルズ地方にはまだまだナロウボートが行けるところがある。まずオックスフォード。テムズ川上流のオックスフォードから北に向かうオックスフォード運河があり、グランドユニオン運河に接続している。オックスフォード運河は沿線の美しい田園風景で人気が高い。オックスフォード駅近くに船溜まりがあった。

またテムズ川をもっとさかのぼってテムズ川の始点より上流のコルン川のレッチレードにまで行くことができる。



写真-10 オックスフォードの船溜まり

運河の両岸に停泊

11. 終わりに

水辺を中心にコッツウォルズ地方を紹介させていたが、ほかにもきれいな水辺の風景や各種庭園などが多くあり、時間とお金があれば、ナロウボートのゆっくりした旅を楽しむなど、じっくり時間をかけて滞在したいところである。